

4章

知的障害者への本の紹介と読み聞かせ

知的障害者は本が苦手と思われがちですが、自分の関心のある分野の本でしたら興味をもって読んで（見て）くださいます。また、自分で読まなくても、読んでもらうことによって本を楽しむこともできます。この章では、知的障害者への本の紹介の仕方と複数の人への本の読み聞かせについて述べます。

1. 本の紹介

知的障害者に本を紹介するには、その人がどんなことに興味・関心があるのかを知ることが何より大切です。もし個々に話をする機会があったら、どんなことに興味をもっているか、どんなことが好きなのかを聞いてみるのが本を選ぶ際の大きな指針になるでしょう。その人の興味・関心のあるテーマのいろいろな本を選んで紹介できれば、きっと楽しんでもらえます。子ども向きの本から図や写真が多い専門書に至るまで、できるだけ広範囲に本を集めて見ていただくことが大切です。また、なかには自分の興味のあることをほかの人には知られたくないという人もいますので、会話の時や本を見てもらう場所などのプライバシーには気を配る必要があります。

そのうえで、本の紹介は①一人ひとりとの会話を通じて、②何人かを対象とした読み聞かせを通じて、③本を紹介したチラシなどを通じて、④施設などの窓際、食堂の一角、部屋の机の上などのスペースに本を展示することを通じて等々、さまざまな方法を駆使して行いたいものです。

季節や行事に関連した本、テレビや映画などで話題になっている本、食べ物（例えばカレーライスや寿司）、乗り物等々③と④の方法で知ってもらい、そのうちの何冊かをその場で読んだり紹介したりできるとよいでしょう。チラシや展示では一度に沢山の本を紹介するよりも、1つのテーマについて5冊程度に絞るのがよいでしょう。

2. 本の選び方

どんな本を選べばよいか、2章「2. 知的障害者が求める本」(pp.20-23)と「知的障

害者を対象とした図書館と本についての調査¹を参考に考えてみましょう。

好きな本のジャンルは「マンガ」と「絵本」がとても多く、「絵本」に関しては重度の人が6割以上を占めています。次いで「乗り物」が「マンガ」の半数ほど、次いでその半数ほどで「生き物」が続きます。以下「小説・エッセイ」（軽度の人8割）、「図鑑」（重度の人6割）、「旅行」「料理」「スポーツ」「芸能・ファッション」などとなっています。

その反面、読みにくいわかりにくい本のベスト3は「文字ばかりの本」「漢字の多い本」「小説」で「文字ばかりの本」は重度の人、「漢字の多い本」は軽度の人が多く、「小説」は軽度の人のみとなっています。紹介する本はこうした調査結果を考慮に入れて選びたいものです。

それに対して、表現形態へのニーズでは「漢字が少ない」「ルビを振る」「文字が大きい」「絵や写真が多い本」「絵だけの本」「色彩が豊かだったり絵のきれいな本」「音が出て読んでくれる本」「触れることができる本」等が上がっています。「音が出て読んでくれる本」という要望はマルチメディア DAISY 図書や代読の可能性を示しているでしょう。また、アイドル歌手の歌っている歌の歌詞を知りたいという要望もかなりありますが、CD等に付いてくる歌詞カードは文字が小さいうえに、漢字やアルファベットがたくさん出てきますので、大きく拡大したうえ（拡大コピーや拡大写本）で漢字やアルファベットにルビを付けると読みやすいと喜ばれます。

まずは絵本やLLブックも含めて、絵や写真などが豊富で、見て楽しめるものがおすすめです。鉄道、乗り物をはじめ犬、猫、モルモット等の身近な動物、パンダなど動物園で見られる動物等の本、お菓子やたべものの本、たとえばお寿司の絵や写真が豊富に出てくる本、映画やテレビなどで話題になっているマンガや芸能関係の本、スポーツの本、おしゃれに関する本などを選びましょう。

3. 本の読み方の工夫

知的障害者が興味をもって読んで（見て）みたいと思うような本をどのように紹介すれば効果的なのか、ここでは東京都立多摩図書館が作成した資料を基に考えていきたいと思っています。

この資料は東京都立多摩図書館が都立の特別支援学校と連携して実施してきた8年間の経験を元に作成されたもので、初めの部分に「特別支援学校での読み聞かせ6つの手法」²が載っています。この6つの手法は特別支援学校の子どもたちだけではなく、知的障害者への読み聞かせ、本の紹介でも生かせる工夫だと思います。以下その6つに加えて、筆者

1 藤澤和子編著『公共図書館でできる知的障害者への合理的配慮』樹村房，2019，pp.31-49.

2 『特別支援学校での読み聞かせ：都立多摩図書館の実践から』東京都立多摩図書館，2013。 <https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/uploads/tokubetsu.pdf>

の経験から4つを加えた10の方法を紹介します。

1) 寄り添って読む

重度の人には、絵本の文章どおりに読むのではなく、その人の気持ちに寄り添って語りかけます。お寿司の絵本であれば、「おいしそうですね」「どのお寿司が好きですか」、動物の絵本であれば「犬はお好きですか」「もうじき子犬が産まれますね」など、一対一で語りかけながら読んでいきます。

『どんなおべんとう?』(いわきあやこ絵, 麦田あつこ文, 小学館, 2022)

『おすしやさんにいらっしやい!: 生きものが食べものになるまで』(おかだだいすけ文, 遠藤宏写真, 岩崎書店, 2021)

『こいぬがうまれるよ』(ジヨアンナ・コール文, ジェローム・ウェクスラー写真, つばいいくみ訳, 福音館書店, 1982)

『パンダ』(岩合光昭写真, 新潮社, 2007)

2) 一部分を読む

本の初めから終わりまで、全部読まなくてもよいのです。その人が興味をもつ部分だけを読むことから始めましょう。たとえば、電車の絵本であれば、一番好きな新幹線の場面だけを、仕事の絵本であれば、消防士の場面だけをじっくりと楽しめます。興味が広がるにつれて、楽しめるページが増えていくでしょう。この手法は、図鑑や知識の本で特に効果があります。

『めくって学べるしごと図鑑』(学研プラス, 2020)

『ただいまお仕事中』(おちよしこ文, 秋山とも子絵, 福音館書店, 1999)

『のぞいてみよう! 厨房図鑑』(科学編集室編, 学研プラス, 2012)

『大きな運転席図鑑 きょうからぼくは運転手』(元浦年康写真, 学研プラス, 2010)

『図解絵本 東京スカイツリー』(モリナガ・ヨウ作・絵, ポプラ社, 2012)

3) ダイジェストで読む

文章どおりに読まれると理解できない人、最後まで聞くことが難しい人には、ストーリーをかいつまんで話したり、やさしく言いかえたりして、読みましょう。ストーリーの本筋に沿って、本のもち味を損なわないように、伝えたいものです。読み手は、どのように読むか事前に準備しておきます。聞いている人の様子に応じて臨機応変に対応するとよいでしょう。

例えば、『注文の多い料理店 (名作文学紙芝居)』(宮沢賢治原作, 諸橋精光脚本・絵, 鈴木出版, 2019) の場合、そのまま読むと13分ほどかかりますが、扉に書かれた文字を中心にほかの部分はかなり省略して読み進めると5分以下で読むことができます。

4) 読んだことを体験する

実物を添えたり、読んだことを体験してみると、本への興味が深まります。ドングリの絵本なら、実物のドングリで聞き手の興味をとらえ、視線を本のほうへ誘ってみます。

『干したから』（森枝卓士写真・文，フレーベル館，2016）はさまざまな乾燥食品を紹介した写真絵本ですが，ダイコンと切り干しダイコンなど，元の食品と乾燥食品の実物を見せたり，かつお節は現物を見せて，元はどんな生き物だったかを想像してもらうのもよいでしょう。また同じ作者の『食べもの記』（森枝卓士，福音館書店，2001）には，乾燥食品だけでなくさまざまな世界の保存食も写真で紹介されていますので，併せて紹介すると興味が広がるでしょう。

5) クイズをしながら読む

本を読む前にクイズを入れるなどして，聞く人と応答してから読むと集中していただけます。また，クイズが好きな人も多く，クイズ形式の絵本を読むとよいでしょう。例えば「十二支の絵本」を読む前に皆さんの干支を聞いたり，来年の干支を答えていただいたりしてから読むことも導入になります。『どっどこどうぶつえん』（中村至男作，福音館書店，2014）では，ドットで描かれたさまざまな動物を，『いるいるだあれ』（岩合日出子文，岩合光昭写真，福音館書店，2007）は動物のシルエットから動物名を，『やさいのおなか』（きうちかつ さく・え，福音館書店，1997）は野菜の断面から野菜の名前を当ててもらいます。

6) 繰り返して読む

機会があれば同じ本を繰り返し読むと，そのときに応じていろいろな楽しみ方をしてもらえます。また，『おおきなかぶ』（A・トルストイ再話，内田莉莎子訳，佐藤忠良画，福音館書店，1966）のなかで繰り返される「うんとこしょ どっこいしょ」などのようにくり返し出てくる言葉を一緒に唱和してもらうことで，本読みに参加していただくこともできます。小さい頃に読んでもらって楽しんだ絵本などですと，また読むのも実りがあります。年月がたった分だけ，絵本をより深く受け止めることができるでしょう。

7) 紙芝居を有効活用する

紙芝居は舞台があることで絵本などとは違った臨場感があり，皆さんの注意を引きやすい資料です。紙芝居を演じるときには読み手の顔を隠さずにみんなに見えるように皆さんの表情を見ながら読みましょう。

『おおきくおおきくおおきなあれ』（まっすいのりこ作・絵，童心社，1983）や『いもむしころころ』（長野ヒデ子，童心社，2017）等は幼い子ども向けの紙芝居ではありますが，演じ方によっては大人でも十分楽しめる紙芝居です。

『ばたもちばあさん』（国松俊英脚本，川端誠画，童心社，1996）など民話を題材にした



図4-1 知的障害者に紙芝居を読む

紙芝居も多く、知っている話もありますので多くの人に楽しんでもらえると思います。

また、『ごんぎつね（紙芝居 新美南吉童話名作集）』（清水たみ子脚本，長野ヒデ子絵，童心社，1994）や『くるみわり人形（かみしばい世界の名作劇場）』（ホフマン原著，あべしまこ文，吉田尚令絵，童心社，2022）など名作や落語などを紙芝居化したものもたくさんあって，原作では難しい話も楽しむことができるでしょう。

8) 歌や音楽を取り入れる

絵本や紙芝居などを読む場合，歌や音楽を入れるととても効果的です。歌などが出てくる作品はもちろん，どんな絵本でも，言葉にちょっとした節をつけるなど音楽に乗せることによって，聞き手を引き込むことができます。また，絵本を読む前に関連した歌を歌うなども効果があります。替え歌の絵本『ねばらねばらなっとう』（林木林作，たかおゆうこ絵，ひかりのくに，2017）は「静かな湖畔」の替え歌絵本です。カッコーという歌詞の部分をナットーに替えるのですが，皆さんに「ナットー，ナットー，ナットナットナットー」と唱和してもらいながら進めていくと盛り上がります。

『ぐりとぐら』（中川李枝子文，大村百合子絵，福音館書店）の中には何回か歌が出てきますが，自分なりに工夫して歌にするとよいでしょう。なお『ぼくらのなまえはぐりとぐら—絵本「ぐりとぐら」のすべて』（福音館書店母の友編集部編，福音館書店，2001）には読者が作ったこの歌の116の楽譜が採録されています。

『おおきなかぶ』（A・トルストイ再話，内田莉沙子訳，佐藤忠良画，福音館書店，1966）の初めの部分に出てくる「あまいあまい かぶになれ，おおきなおおきな かぶになれ」というお爺さんの言葉を歌にするとお話の導入として効果があります。図4-2の楽譜は筆者が作曲した例です。

Piano
あ まい あ まい かぶになれ

Pf.
おおきなおおきな かぶになれ あまい あまい

Pf.
かぶになれ おおきなおおきな かぶになれ

図4-2 おおきなかぶのうた楽譜

絵本や紙芝居の中には歌が出てくるものも多く、楽譜が載っていない場合がほとんどです。できるだけ歌の部分を楽譜に起こして歌いたいものです。

9) 絵だけのページに文章を加える

絵本の中にはストーリーの展開を絵だけで表現しているものもあります。ぱっと絵を見ただけでは理解が難しいような場合には、文章起こしをして言葉を補って読む工夫を試みてください。

ここでは横浜市立盲特別支援学校の例を紹介します。2009年の読書感想文コンクールの課題図書になった『おこだでませんように』（くすのきしげのり作、石井聖岳絵、小学館、2008）の8ページは「ぼくはがっこうでもよくおこられる。」という文章とカマキリを見せられて女の子が怖がっている絵の場面です。特別支援学校では、この画面にさらに下記のような文章を起こして加えています。「ぼくはがっこうにいくとちゅう／おっきいカマキリをとった。／ともちゃんよろこぶとおもうたんや。／ともちゃんにあげようとしたら／ともちゃんないてしもた。／／せんせいにまたおこられた。」（なお、この部分の文章起こしについては作者に連絡を取り相談したうえで文章化したと聞いています）。

また次の9ページも白い服とほっかむりとマスクを付けた僕が給食の器に山盛りのスパゲティーをついでしまい、慌てて先生が止めようとしている絵だけが描かれています。そこには「きゅうしょく とうばんのとき スパゲティーを やまもりついでしまって またせんせいにおこられた」と文章を加えると、給食のときの様子で一人分のお皿に必要な以上にスパゲティーをついでしまった場面ということがわかりやすいでしょう。



図4-3 くすのきしげのり作，石井聖岳絵『おこだでませんように』小学館，2008，pp.8-9.

10) ゆっくり読む

絵本などを読む場合には普通よりもゆっくと時間をかけて読むとよいでしょう。聞き手の表情を見ながら，楽しんでくださっているかどうかを確認しながら読みましょう。

文章にある一つひとつの言葉を丁寧に話すこと，その中でキーとなる言葉についてはゆっくり際立たせて読むと，聞いている人の理解が増すでしょう。

絵本は“絵”本であり，本来1ページ1ページの絵をゆっくり見て楽しむものです。ともすると文章を読んでいくことが主になりがちですが，時間をかけて絵を楽しんでもらう工夫も必要です。

4. 複数の人を対象とするときの技法と注意点 (読み聞かせ・ブックトーク)

(1) 読み聞かせ

施設などで複数の人に絵本や紙芝居を読む場合の注意点を以下に掲げます。

①読む場所を確保する。

読み聞かせを行う場所は，周囲の音が入らず，周りの人の動きなどが気にならない部屋が望ましいですが，部屋がない場合には廊下の片隅や部屋のコーナーなど落ち着いて聞ける環境であればよいでしょう。

4人以上が参加する場合には立って読むことになりますが，少人数の場合には座って読むこともできます。2～3人ならば目の前に座ってもらい，読み手も座って近くで読むと，より親近感が増すことでしょう。

大勢に読む場合には，どの人からもよく絵本が見えるように読み手の位置と聞き手の位置を調整します。聞き手が横に広がりすぎないように気を付けます。

絵本を少し上向きに持つと蛍光灯など照明の光が絵本に反射して，絵が光って見えにくくなることがありますので，立って読む場合には少し前（見ている人の目の位置）に



図 4-4 知的障害者に絵本を読み聞かせる

傾けて読むとよいでしょう。

- ②複数の人への読み聞かせでは、誰もが理解できる内容や難易度であるかに配慮し、なるべく多くの人から「おもしろかった」という感想がもらえる作品を選びましょう。
- ③読み聞かせる絵本や紙芝居の出し物は5～7分程度のものを2つ、合計15分以内が適当です。出し物と出し物との間にクイズを入れたり、出し物に関連した歌を入れたりしてもよいでしょう。
- ④なるべく絵が大きく色や輪郭がはっきりしていて、遠くからでもよく見えるものを選びましょう。その点紙芝居は有効です。一般の絵本を大型化した行事用大型絵本もおすすめです。
- ⑤聞き手に届くように大きくはっきりした声でゆっくり読みましょう。しかし突然聞き手が驚くような大きな声を出すのは避けましょう。
- ⑥できるだけ聞き手の顔を見ながら読みます（紙芝居の場合も）。そのためには半分暗記しておくくらい読み込んでおきたいものです。
- ⑦まず表紙を見せ絵本のタイトルを読み、見返し、標題紙とめくっていきます。絵本によっては、表紙や見返しからお話が始ったり、見返しなどに絵本と関連のある絵が描かれていることもあるので、その場合にはその絵をしばらく見せるようにします。
- ⑧絵本がぐらついたり、傾いたりしないよう、利き手でしっかり絵本の中央下（本のノド）の部分を持ちます。絵本が右開きか、左開きか、左右どちらのページに文字がたくさん印刷されているかなどで読みやすいように持ち手を替えてもよいでしょう。
- ⑨ページをめくるときには手が絵の邪魔をしないように、スムーズにめくれるように注意します。物語の進行に合わせて早くめくったり、ゆっくりめくったりという変化を付けることもあります。また、文章の書かれているページが絵のページと合わない場合も多いので、どの文章をどの絵の部分で読んだらよいのか確認しておく必要があります。

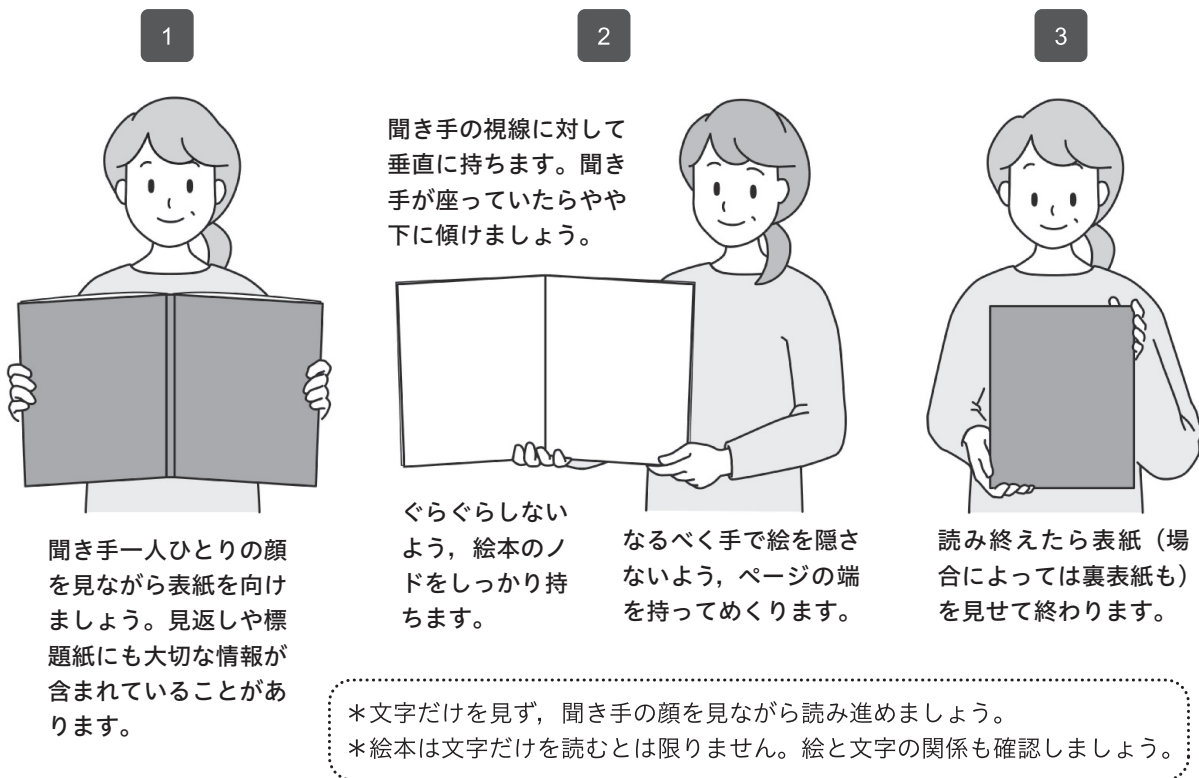


図 4-5 絵本の読み聞かせ方

⑩絵本を読み終わったら、裏表紙を見せ、再び表紙を見せます。表紙と裏表紙の絵がつながっている絵本は、開いて両方を見せます。

(2) ブックトーク

通常のブックトークでもいえることですが、多くの人を対象にしたブックトークは人数の人が多くなればなるほど難しくなります。読み聞かせのように誰もが理解できるように難易度の低い本を選べば、軽度の人には物足りないものになってしまいます。また、一人ひとり関心のありようや読書経験や能力が違うので、できるだけ特定の個人を対象として考えることが大切です。さらに、ただ本を渡すだけでは読書に結びつかないと思われる人に対しては、その本のいちばん興味を引く部分を読んだり、場合によってはゆっくり時間をかけて1冊まるごと読んでしまったりと、紹介の仕方を柔軟に変える事も考えましょう。個人へのブックトークでは、その人の興味ある主題とその周辺の本を紹介できます。もし可能ならば、紹介する本を選ぶときには図書館に来館していただき、館内を一緒に歩いて、その人の興味・関心のある棚を案内するとよいでしょう。

複数の人にブックトークを行う場合には、時間は10～15分で、紹介する本は3～5冊程度が望ましく（ブックトークになじみのない人を対象とする場合には1～2冊でもよい）、テーマは特に決める必要はなく、読んでほしい・楽しんでほしい・きっとおもしろいはずという本を選ぶとよいでしょう。次に、ブックトークの例を2つ挙げて具体的な方

法を紹介します。

1) 恋をテーマにしたブックトーク

恋をテーマに数人を対象に行ったブックトークの例です。

まずは、二匹のうさぎが結ばれるまでを描いた絵本『しろいうさぎとくろいうさぎ』（ガス・ウィリアムズぶん・え，まつおかきょうこやく，福音館書店，1965）を読みます。

次に『赤いハイヒール～ある愛のものがたり～』（ビョーン・アーベリン写真，ロッタ・ソールセン文，中村冬美訳，日本障害者リハビリテーション協会，2005）のマルチメディア DAISY をパソコンの画面あるいはプロジェクターを使って，スクリーンや白い壁などに投影して見てもらいます。この本はスウェーデンでつくられた，写真による LL ブックで，写真とテキストが画面に表示され，黄色くハイライトされたテキストの部分を音声で読んでくれます。本もありますので一緒に紹介します。全編見てもらうには長いようでしたら前半の3分の1位まで見てもらい，続きは本を読むように勧めたらと思います。

おしまいに，こちらは日本でつくられた写真版 LL ブック『はつ恋』（藤澤和子・川崎千加・多賀谷津也子企画・編集・制作，樹村房，2017）を読みます。ユーモアのある内容で小さな話がいくつも載っていますので，全部を読むと長く感じるようでしたら，いくつかの話のうちの一つか二つを読むとよいでしょう。時間があれば『100万回生きたねこ』（佐野洋子作・絵，講談社，1977）や読み物が好きな人がいたら『シェイクスピア物語』（ラム作，矢川澄子訳，岩波書店，岩波少年文庫，2001）に収録されている「ロミオとジュリエット」などを紹介してもよいでしょう。

2) 写真版 LL ブックを紹介するブックトーク

LL ブックは知的障害者等を主な読者対象にしています。こうした本を紹介しない手はありません。しかし，ただ「こういう本がある」と紹介するだけでは読んでくれないでしょう。ブックトークや読み聞かせで積極的に紹介する必要があります。

『旅行にいこう！』（藤澤和子・川崎千加・多賀谷津也子・小安展子企画・編集・制作，樹村房，2019）は，9つのエピソードがそれぞれ4～5枚の写真で構成されています。エピソードごとに，誰が登場し，どんな場面なのかを簡単に説明すると，よりわかりやすくなって楽しめるでしょう。例えば，4の「金魚とキス」は，「おじいさんとおばあさんは水族館に行きました」と説明してから写真を見てもらいます。9の「きねん写真」の始めの場面では「おとうさんが木の下でみんなの写真を撮ろうとしています」，次の場面では「ゴツン！ いたっ！」と言葉を添えてもいいでしょう。

日本で刊行された LL ブックについては，2章末の一覧を参考にしてください。

（山内 薫）